

櫻あめ

芝田町三丁目

あめや長左衛門

〔武江年表〕六此年間永〇安記事

安永十年俳人提亭の撰たる種おろしと云句集に載る所の、其時代のはやり物商物目録左に略

記す、〇中飴目黒桐屋雑司が谷川口屋

〔還魂紙料〕上千年飴。

元祿寶永の比、江戸淺草に七兵衛といふ飴賣あり、その飴の名を千年飴又壽命糖ともいふ、今俗に長袋といふ、飴に千歳飴と書こと、彼七兵衛に起れり、生質酒を好で世事にか、はらざるの奇人なり、今様廿四孝寶永六年印本の卷に曰、千年の七兵衛といふ、飴賣あり、樂に養ふ子のあるに、いかないかなそれにか、らず、江戸中を空にして童にねぶらし、價の其錢をすぐに處々にて酒にして、春秋の榮枯を息なし吞の一盃にらちをあげて、年のよらぬ顔をひさしく見ること、頬髭をかこち給ふ、堺町のさる野良のあやかりたしとまうされぬ云々、寶永六年に久しく顔を見るとあれば、貞享或は元祿の初より、其名を人に知られたる歟、

〔嬉遊笑覽商賈十一〕今江戸に飴と古きせるなどを、かへにありく者あり、とつかへ、いと名く、其ことばにめげたらしよ、きせるの古いと、つかへべにしよと呼ぶ、諸艶大鑑、松屋焼の土火入に、取集めたるめげ烟管といへり、損へることをめげるといひ、缺瓦をめげと云、めげたらとはつぶれたるきせるを云ふなり、今是をかへる飴賣も見付たらといふこと、心得めり、此飴賣の事を、或説に正徳の頃、淺草田原町に善右衛門といふ者ありしが、生國紀伊國道成寺の僧、つき鐘建立の爲に、江戸に下りて、この事に頼まれしかば、飴と古かねと取かへて、町々をあるきし、是その始なり、その後すたれて、寶曆三年の頃より、神田小柳町に甚右衛門といふもの、異なる聲して、とつかへ